

著者は「イエスが来たのは、律法を廃するためではなく、完成するためである」と言います。「完成する」と訳されている語は、「成就する」とも訳せ、そのように理解した方が良いと思います。著者は、イエスが来たのは、律法を廃止するのではなく、またより完成された律法を定めるためでもなく、律法が目指していたものを実現するためだ、と言うのです。著者は、19 節で、律法を最も小さな掟まで厳格に守るように要求します。ここで、最も小さい掟を破り、そうするように教える者は「天の国で最も小さい者と呼ばれる」と言われています。この表現は、最も小さい掟を破りそう教える者も、末席ながら天の国で席が与えられているように読めますが、これは天の国に入ることができないと理解されます。著者は、この言葉によって、信仰共同体の中に見られる律法を軽視する傾向に対して厳しい警告を発しているのです。著者はモーセ律法の規定を細部に至るまで文字通りに遵守するように求めているわけではありません。著者にとって、「律法を守る」とは律法の正しい解釈と生活の中での実行です。著者は 20 節で、律法学者やファリサイ派が主張しているような仕方で律法を守り、彼らの規準で義と認められただけでは、イエスが伝えた天の国に入ることにはできない、神さまの救いにあずかることができない、と言います。著者にとって「義」とは、単に内面における神さまとの正しい関わり方だけではなく、神さまの御心にかなった正しい行為と生活を意味していました。

では、律法学者やファリサイ派の人々にまさる義とはどういうことなのでしょう。このことを著者は続く 5:21~48 の「対立命題」で明らかにするのです。「対立命題」というのは、「あなたがたも聞いているとおりに、……と命じられている。しかし、わたしは言うておく。」という前置きをもって、ユダヤ教において伝承されてきた律法に対立する形で示されるイエスの言葉です。

律法学者やファリサイ派の人々は、自分が律法をどれだけしっかりと忠実に守っているかということ、自分の救いの拠り所としています。自分で自分の正しさを立てようとしているのです。しかしイエスを信頼する信仰者を支えている義は、イエスの十字架と復活によって神さまが与えた義です。それは人間が努力してうち立てる義ではない、神の義なのです。この神さまから与えられる義によらなければ、天の国に入ることは決してできないのです。天の国に入るとは、神さまの恵みの下に生きる者となることです。それが救いに与ることです。この神の義によって生かされ支えられて歩むことこそ、律法学者やファリサイ派の人々の義にまさる、イエスを信頼する信仰者の義なる生活なのです。